

退職記念最終講義

個を大切に作るデンマークの保育に学ぶ
—自立性と自己決定を重視した実践—櫻谷 眞理子ⁱ

はじめに

ライフサイクル論は人が生まれてからその life (命) が尽きる時まで、人の一生について洞察を深めることが目的なので、「いかに生きるのか、よりよく生きるとは……」といったこともテーマにしました。講義で取り上げた事例や年齢や国籍も違い、背負っているものが異なる人たちの生き方を通して、「自分らしく生きるとは……」ということについて考えさせられた人も多いことでしょう。

さて、最終講義では、人生のスタートラインに戻り、人格形成の基礎を築くために何が大切なのか、どのような環境を整える必要があるのか、デンマークの保育を例にしながら考えてみたいと思います。特にデンマークでは一人ひとりの子どもの人格や個性が大切にされていることに着目し、「個を大切に作る保育に学ぶ」というテーマにしました。

澤渡¹⁾ (2005)、大野 (2010)²⁾ らの研究からも、デンマークでは、子どもの成長のペース、興味・関心の違いに配慮した保育がなされていることがうかがえます。また、自分で考え自分の力で物事を行う自立性や自己選択・自己決定することが重視されており、保育士は子どもが何をしたいのか、子どもの気持ちを聴くなど、対話を大切にしていることがうかがえます。

青江 (2010)³⁾ も、「保育園や家庭では、話すこと、聴くこと、対話を大切に、一人一人の気持ちを大事にしながら子育てをしています」、また、「デンマーク人は幼少期よりユニークな個人として、自分の意思が尊重され、相手の意思を尊重することを学びます。周りから、押しつけられず、自主性を促され自分のありのままの姿で、自分の納得できる人生を生きるように、励まされて成長した人々によってデンマークの社会は築かれたのだと思います」と述べています。

このように、子どもの自主性・主体性が重んじられる自由な雰囲気の中で、子どもたちはあるがままの自分を受容され、その子らしく育てていくことが推察されますが、本論に入る前に、私がなぜデンマークに関心を持つようになったのか、ごく簡単にお話します。

i 立命館大学産業社会学部教授，2015年4月より特別任用教授，名誉教授

1. 病院で寝たきり

三重県身体障害者更生相談所で働いていた時に、「入院中の母親を施設に入れて欲しい」という相談がありました。来所された息子さんは、一人暮らしなので母親を引き取ることはできないが、寝たきりの母のことが心配だと語られました。入院先は相談所からさほど遠くない所にあったので、ご本人の意向も聞いてみることにしました。

病院の長い廊下を歩き、部屋のドアを開けた時の光景は今でも目に焼き付いています。壁もカーテンも白く寒々とした雰囲気漂う中、依頼者の母親はうつろな表情で天井を眺めておられました。名前をお呼びしても、返事がありませんでした。家に帰ることもできず、ベッドに寝たまの日々を過ごすうちに、生きる気力も希望も無くされたのではと思うと胸が痛みました。こうした、高齢者を寝たきりにさせてしまう社会的入院を減らすためにも、日本の医療と福祉を変える必要があることを痛感しました。

2. 寝たきりにさせない

1990年に出版された『寝たきり老人のいる国、いない国』⁴⁾という本を読んでもと、デンマークでは日本の現状からは想像もできない手厚いケアがなされており、寝たきり老人がいないと書かれていました。

この本を契機にデンマークの福祉を学びたいという思いが募り、1991年の夏に高齢者福祉の研修に参加しました。ホルベック市では、訪問看護師やホームヘルパーの仕事に同行しましたが、どの家もきれいで、住む人のゆとりを感じました。特別養護老人施設（プライエム）も見学しましたが、個室が保障されており、家族の写真を飾り、観葉植物や花に彩られた部屋は、居心地が良さそうでした。

認知症専門のホームも全て個室でした。部屋には自宅で使っていた家具が置かれており、「生活の継続性」が図られていることがうかがえました。また、服装やマニキュアなどの好みも家族に聞き、家庭にいた時と同じように装うことを心がけているという話でした。明るい色の服を着て共用の広いリビングの椅子に座り、ケアワーカーとコーヒーを楽しむ姿を見ていると、認知症ケアへのイメージが大きく変わります。一人の人として尊重される、安心できる環境を用意すれば、穏やかな日常を送ることができるのだと思いました。

ある高齢者の施設では、癌を患っているため自室で静養しておられる方にお会いしましたが、その方も午後になると、テラスのような場所にベッドを移してもらい、日光浴をされていました。このように手厚い介護がなされており、寝たきりのまま放置されることは無いと思いました。

3. 快適な住まいとケアの質の向上

1990年代後半になると、新自由主義的な価値観や市場原理の影響を受け、福祉サービスも必要があれば民間への委託を行っていくという方向へ政策転換がなされました。また、2001年から10年間続いた自由党・保守党の政権下では、富裕層への減税がなされたことや世界経済危機の影響を受け、財政面でも厳しくなったようです。2011年9月、社会民主党に政権が交代しましたが、移民の問題など困難課題を抱え、高福祉を維持することは容易では無いことがうかがえます⁵⁾。「誰もが自分らしく生き、自分らしい生活」を送ることができると目指してきたデンマークの挑戦は今後どうなっていくのか気になるところです。

このように、常に関心を持ち続けてきたデンマークですが、訪れる機会が無いまま20数年の歳月が過ぎました。しかし、2013年に念願がかない、福祉・教育の研修に参加する機会を得ました。そして、2014年にも再訪しました。訪問先は、いずれもロスキレ市です。デンマークの古都で、世界遺産のロスキレ大聖堂が有名です。

高齢者の施設を訪ねて、まず驚いたことは、一部屋だけの個室が無くなり、二部屋に広いシャワールームが付いた住居が標準になっていたことです。約34.8m²あり、キッチンも設置されていました。ある高齢者（88歳の女性）の住居を訪問しましたが、アンティークで素敵な家具が置かれたリビングは、趣味の良い調度品がいくつも飾られていました。近くに住む娘さんと一緒に午後のひとときを過ごしておられる姿を見ると、日本の特別養護老人ホームとの格差が大きいことを痛感します。家族はいつでも気軽に訪ねることができるので、娘さんも数日置きに訪ねて来られるそうです。

次に訪ねた高齢者ケアセンター、アスターズパイでは、認知症の方に対して興味深い取り組みがなされていました。例えば、オランダのマリア・アーツが開発した「マーテ・メオ方式 (Marte Meo Methode)⁶⁾」によるケアがなされていました。「マーテ・メオ」とは自分の力という意味らしいです。「認知症の方は言葉を失っておられるので、言葉を添えてあげることが大切です。また、良く見て、感じて、待つてあげることが大事です」、とハンナ・フロストから説明を受けました。

ある認知症の女性がミシンをかける場面を映したDVDを見せてもらいましたが、その中で、「あなたはそれが得意なのね」「いつも、それをやっていたのかしら」といった言葉かけがなされました。すると、自分の過去を思い出したのか、「縫い子だったの」と言葉が出て来て、笑顔がこぼれていました。また、お皿を拭き、戸棚にしまう場面では、達成感からなのか暗い表情が一変し、笑顔で応答する姿が映し出されていました。「全てを失ったのではない」、「自分にもできることがある」ことを実感し、うれしさがこみあげたのだろうと思いました。

このように、「生活の継続性（人生の継続性）」「自己決定の尊重」「残存の能力の活用」といった原則を踏まえつつ、さまざまなチャレンジが続けられていることがうかがえました。

I. デンマークの国づくり、高福祉の基盤

1. 民主主義と人権の尊重

では、どうしてデンマークは世界がうらやむような福祉の国になったのでしょうか？様々な要因が考えられますが、ここでは民主主義が発達した国であり、言論の自由、選択の自由、人権を大切にできる国民性に注目したいと思います。

つまり、民主主義と人権思想が国民の意識の中にしみこんでいるからこそ、「経済的な豊かさを競うのではなく、多少のがまんをしてでも誰もが平等に、幸せに生きられる社会を作ることに合意する」ことができるのだと思います。なお、澤渡さんから、民主主義の柱は『自由』『平等』『連帯』『共生』だということをうかがいましたが、こうした思想が形成されなければ福祉を発展させることはできなかったと思われます。

したがって、デンマークの福祉・教育の成り立ちを知るためには、民主主義の歴史を振り返ることや、近年を代表する啓蒙家や教育者、なかでも福祉ではN.E.バンク・ミケルセン（1919-1990）⁷⁾、教育ではN.F.S.グルントヴィ（1783-1872）⁸⁾の思想を理解することが大切です。バンク・ミケルセンは「ノーマリゼーション」の考え方を世に広め、ニコライ・グルントヴィは今日の教育の基礎を築き、自由の学校「フォレケ・ホイスコレ」を創設しました。

2. 民主主義を基盤にした学校教育

2014年にロスキレ市のブロンビュー・ストランド国民学校（小学校）を訪問し、授業の様子を見学しました。

クラスの平均の人数（2012年）は19.6人⁹⁾だと聞いていましたが、美術教室での授業は、10人程の子どもを二人の先生が担当していました。低学年の子どもたちなので、学童保育の指導員が補助に入っているということでした。

子どもたちはおしゃべりしながら、自分のペースで課題に取り組んでいました。作業が遅れている子もいましたが、教師から急ぐようにと指示する言葉は聞かれませんでした。また、紙を選ぶ時も、一人ひとりの子どもを保管室に呼び、どれがいいのか尋ね、自分で選ぶように促していました。このように、個々の子どもの好みが尊重される環境の中で、子どもたちはゆったりと学んでいました。なお、テストも通知表も無いので、学力面で早くから差別・選別がなされることはありません。

ところで、小谷正登はデンマークの教育の基本は民主主義であり、「参加し協議して決議し、協議したことに責任を持ち、結果を共有する」¹⁰⁾ことを重視していると論じています。また、「国民学校法」には、①自己表現、②自己決定、③社会性、④創造性に注目した教育を行うようにと書かれているそうです。

澤渡さんも、「デンマーク人は、『権力・管理・競争』から得るものは何もないと思っており、『平等、対話、個の尊重』が大事だと考えている」と述べていますが、こうした考え方が教育にも反映されているのでしょうか。

私が訪ねた国民学校でも、教師と子どもはよく話しあっており、権威主義を廃し、平等な関係を重視していることがうかがえました。子どもたちも安心して過ごし、仲間と一緒にいる喜びを味わっているようでした。こうした教育がなされる中で、お互いの価値を認め合い、共に生きる素地が育まれるのでしょうか。

なお、デンマークは、GDP（国民総生産）の8.5%を教育に支出していますが、エリートを養成することを重視する国々のように、「優秀な人材の開発」を行うためではなく、一人ひとりのニーズに応じた教育を保障するために使われているのだと思います。

3. デンマーク人の考える民主主義とは

民主主義についても興味深い話を聞きました。道幅を広げるため、一本の木を切らねばならない事態が発生した時のエピソードです。住民が集まり、話し合いを続けただけで結論が出ないまま、何カ月も経ちました。すると、木の所有者は、みんなが話し合ってくれたことに納得し、木を切ることに承諾したという話です。

このように、「民主主義とは多数決で物事を決める」ことだと思われがちですが、「デンマークでは多数決で物事を決めるのは最後の最後であり、とにかく“本音で語り合い、理解しあう”ことが民主主義である」と中能¹¹⁾さんは説明してくれました。澤渡¹²⁾さんも、「デンマーク人は自分の意思が置き去りにされ、物事が決定されることを好まない。物事の決定に平等に参加し、話し合いで決める。その結果について責任を持つ、このプロセスが重視されている」と語っています。

4. すべての人に平等に「豊かな生活」を保障する

デンマークの福祉事情について学んでいた時、澤渡さんから「福祉とは何か？」と質問されました。そこで、「福祉とは幸福という意味であり、人々の幸福を実現することが目的だと思う」と答えました。

澤渡さんは、「デンマーク人が考える『福祉』とは子どもを含む国民一人ひとりの『豊かな生活』を平等に保障するものであり、一部の人の保障にとどまりません」と話されました。また、「誰もが自分らしく生きられる社会」「格差のできるだけ少ない社会」を目指していると話されました。

このことから、福祉はすべての国民が生まれてから死ぬまで、自分らしく、人間としての尊厳を保ちながら暮らすために必要なものとして認識されており、福祉のために高い税金を払うことを納得しているのだと思

われます。

Ⅱ. デンマークの保育の特徴

1. 子どもの意思の尊重と対話重視の保育

デンマークでは、希望するすべての家庭の子どもに保育が保障されています。待機児童はいません。保育園を訪れると緑の芝生や小山のある園庭が広がっており、活動意欲が高まるような環境が用意されていることがうかがえます。そればかりではなく、保育士と子どもとの関係も親密で、お互いに信頼していることがうかがえます。

興味深いエピソードがあります。日本から見学に来た保育士さんが、私たちはいつも『子どもに話している』と言ったことに対して、デンマークの保育士さんは、私たちはいつも『子どもと話している』と言ったそうです。「～に」と「～と」はわずか一文字が違っただけですが、ここに子どもとの関係が表れています。つまり、「～と」という言葉は対等な関係を示しています。

デンマークの保育士は生活のあらゆる場面で子どもの意思を確かめます。子どもが自分で「選び」「考える」ことを重視する保育がなされているからです。何をして遊ぶのか、何をどれだけ食べるのか、子どもは自分で選択します。問題が起きた時にどう対処するのか、自分で解決策を考えます。このように、子どもの意思を尊重した保育がなされているので、保育士との対話が不可欠なのです。

2. Selvværd（セルヴェア）—自己の価値の重視—

大野（2010）は、セルヴェアを自己の価値と訳し、「Selvværd（セルヴェア）とは体を支える背骨のようなもの、自己の本質です」と述べています。子どもにとって最も大事なものであり、それは、「人間が自分を見失うことなくそのままの自分を肯定しながらしっかりと生きていく力です。また自分がしたいこと、したくないこと、受け入れられること、受け入れられないことをしっかり自覚できる力です。その力があれば、人間は周りのプレッシャーから、自分の本質を守る境界線をハッキリと引くことができます¹³⁾」と述べています。

したがって、親も自分の子どものセルヴェアが育っているかどうか、保育士によく質問するそうです。なお、卒園時の学校への申し送り書にもセルヴェアについて書く欄があります。

大野（2010）はセルヴェアを自己の価値と訳していますが、自尊感情や自己肯定感と同じ意味です。「私は存在価値がある」「生まれてきてよかった」と自分の存在を肯定する感覚だといえるでしょう。こうした感覚は、親や保育士など大人が子どもを無条件に愛し、子どもをあるがまま受容することによって育まれます。

3. パピロン総合保育園¹⁴⁾の「認めの保育」

「認めの保育」というと、ほめることだと誤解する人もいますが、「子どもを良く見て、共感し、理解し、そのまま受け入れてあげる」ことが大切だと大野（2014）¹⁵⁾ 語っています。

もし、「すごいね」「よくできたね」と子どもをほめてばかりいると悪影響が生じます。例えば、大人にほめてもらいたいと思う気持ちが強くなり、大人の顔色をうかがう子どもになってしまう恐れがあります。あるいは、大人に気に入られようとして、指示通りに動く子になってしまいます。すると、本来の自分を見失ってしまうのです。ですから、「子どもの目線に立ち、共感すること、無条件の愛が大切」なのです。

さらに、子どもの感情を認め、受け止める保育がなされています。子どもが感じる感情に、良い・悪いはな

いと考えており、怒り、悲しみ、失望、喜び、嫉妬、落胆など、様々な子どもの感情をそのまま受け止め、言葉を添えてあげます。

例えば、泣いたり、わめいたりしている子どもを抱き寄せ、「怒っているのだね」「悲しいね」と共感しながら、やさしく語りかけます。一方、泣く子を叱ると、子どもは自分の感情を悪いものだとして認識し、感情を抑圧してしまいます。あるいは、自分は駄目な子だと自己認識が歪む恐れがあります。

4. 他の子と比べない

デンマークでは、親も保育士も子ども同士を比較しません。「子どもが比べられるのは、過去の自分とだけ」なのです。ですから、「前と比べて〇〇がうまくなったね」といった言葉かけがなされます。

比較して育てると、他児より劣っている子は自信を失い、コンプレックスを抱いてしまいます。一方、いつもほめられている子どもは偏った自信を持ってしまい、「自分はみんなより優れている」と思う恐れがあります。もし、そうなってしまうと、自分より優れた人に将来出合った時に、簡単に自分は駄目だと思い、落ち込む恐れがあると大野は述べています。

さらに、「自分を周りに理解してもらおう、認めてもらおうと奮闘する必要のない子どもは、自分のことにあまりとらわれず、少々事は我慢し、他の人の立場に立って考えることのできる、心に余裕のある人間形成をしていくと思います¹⁶⁾」と述べています。

子ども時代は個人差が大きく、成長の速度も違います。また、子どもにはそれぞれ得意なもの、不得手なものがあり、興味や関心も違います。それを無視して、子どもを他の子と比べてほめたり、けなしたりすると、子どもの自尊感情が歪んだものになってしまう恐れがあります。

Ⅲ. デンマークにおける保育の実際

2013年8月と2014年10月に訪れたデンマークの保育園（6ヶ園）で見聞したことや、大野睦子ビャーソーと青江知子へのインタビューを基に、デンマークの保育の特徴について、みていきたいと思います。

1. 学びのプランにみる保育のねらい

2008年8月26日に告示された、「ソーシャルサービス法8条」は、日本の保育指針のようなもので、その第2条に、1. 子どもの全面的な人間形成・個の確立、2. 人間関係・社会能力、3. 言葉、4. 体と動き、5. 自然と自然の現象、6. 文化的表現方法と価値という6つのテーマが示されており、このテーマごとに、「学びのプラン」（保育計画）を立てるように示されています¹⁷⁾。

なお、保育の中で重視されている考え方は以下の通りです。①子どもはユニークな個人として認められており、保育士は子どものそのままの姿を受け入れます。②保育士は子どもと同等な位置に立って話をします。③子どもの興味や関心が大切にされ、やりたいことを追求できるように配慮しています。④子どもがいろいろな遊びに挑戦できるように配慮しています。⑤子どもの人格形成、人間関係に重きをおいており、自分を良く知り、自分自身が好きな子どもに育つように、指導しています。⑥子どもはそれぞれ、異なる興味や関心を持っていることを原点にしており、複数の活動が同じ場所で行われるように配慮しています¹⁸⁾。

以下、筆者の体験を基に、実際にどのような保育がなされているのか、見ていきたいと思います。

2. フライヤスヘーブ総合保育園

(1) 園の概要

この保育園は2013年の夏と2014年の秋に訪問しました。町中にあるにもかかわらず、樹木が生い茂り、起伏に富んだ広い園庭があり、大型の滑り台、数人で乗れるブランコ、アスレチックのような木製遊具も設置されていました。また、室内にはジャングルという大あばれできる部屋や演劇を楽しむ部屋もあり、充実しています。保育室は家庭の居間のような雰囲気、木製の遊具がたくさん置いてありました。

建物の中央にあるオープンキッチンでは、有機野菜を使い、健康に配慮した食事が作られていました。11時半から13時の間なら好きな時に食べていいのですが、誰かが食堂に行くと、他の子ども達も空腹を感じてしまうのか同じ時間に集まってくるそうです。昼寝も子どもの自己選択にまかされており、眠たくなった子は一人でベッドにもぐりこみます。なお、戸外の空気が入り込む場所にベッドが置かれていますが、マイナス15度までは外気の中で寝かせても大丈夫ということでした。

(2) 子ども時代は子どもらしく

日課を定め、一斉保育を行うことが無いので、子どもたちは好きな遊びに没頭できます。もちろん、以前は日課や活動プログラムを基に、保育していたそうです。しかし、子どもたちの中から、遊びを中断させられることへの不満の声があがったので、保育を柔軟なものに変えたそうです。

木登りをしたり、自転車で起伏のある園庭を疾走したり、庭の小さな家で仲間と遊んだり自由に遊んでいました。異年齢の子どもたちがふれ合いながら、とても楽しそうでした。樹木の間を抜ける道を行くと、がらくたが置かれた秘密基地が作られており、男の子たちがたむろしていました。大人から見えない場所も必要だと、保育士は語っていました。

(3) 何をしたいのか、自分で決める

園庭に大きなプラスチックの箱を置き、その箱に渡した棒の下をくぐる遊びを設定した時のことです。この活動が楽しそうだと思う子どもは集まってきました。一方、興味が無い子は他の遊びを続けていました。保育士さんに尋ねてみると、保育士が用意した活動に参加するかどうか、子どもの選択にまかせるそうです。

青江さんがパピロン保育園で実習した時も、「ともこが明日は〇〇するけど、参加したい子は園庭に来てね」と前日に予告し、当日は興味を持つ子どもだけ集まって来たそうです。

このことから、自分で選び、自分の好きなことをして過ごすことを子どもの権利として認めていることがうかがえます。

(4) 保育場面のエピソードから

【子どもが自分で滑る日を待つ】

2歳位の男の子が、大きい子どもたちの後を追うように、大型滑り台の階段を昇りました。でも、高い所から滑るのは怖かったのでしょう、階段上の板張りに座り込んでしまいました。カメラを向けている、私の方を見ながらじっとしていましたが、気持ちを切り替えたのか、再び階段を降りてきました。

先生も遠くから、彼が決断するのを待っておられたようです。子どもが望まない限り、手助けはしないようです。子どもが自分で滑る日を待つ方が、滑ることができた時の喜びや達成感が大きいだろうと思いまし

た。保育園での生活の一こまを見ただけでも、ゆっくりと自分づくりをしていることがうかがえます。

【子どもの自制心を育む】

砂場に座り込み一人で遊んでいた女の子に、男の子が寄って来てスコップで砂をかけました。先生は砂場の端に腰かけておられましたが、叱責することはありません。男の子のそばに歩いて行って、スコップで砂をすくってごらんとポジティブな行動を提案しました。男の子は砂をすくい始めましたが、たいくつなのかまた女の子に砂をかけました。すると先生は、男の子に山を作ろうと話しかけ、一緒に遊び始めました。その横で、女の子は何も無かったように砂遊びを続けていました。

このように、デンマークの保育士は望ましい行動を示して、子どもが自分で気持ちを切り替えるのを待っているのだと思いました。他の場面でも、同じようなことがありました。年下の子どもがロープにつかまりたがるのに、押し返している年長の子がいましたが、保育士はさっと駆け寄り、年下の子を他の遊びに誘うだけでしたが、年長の子は、遊びを一瞬止めました。今、この子の心に何か変化が起きたことがうかがえました。こうした保育士の寛容で温かい対応がなされる中で、子どもたちは自分自身と葛藤しながら、成長していくのだらうと思います。

IV. 「森のようちえん（保育園）」の実際

1. 自然の中で育つ子どもたち

(1) 「森のようちえん（保育園）」とは

「森のようちえん（保育園）」¹⁹⁾はデンマークで発祥し、ドイツや北欧の国に広がったと言われています。「森のようちえん（保育園）」の形態はいろいろです。園舎を持たずに、園バスで移動するところもあります。お弁当、おやつなどをリュックに詰めて、森へでかけるところは共通しています。子どもたちは、雨の日でも雪の日でも森の中で、五感をフルに活動させて遊びます。

木登りをしたり、ナイフで枝を削ったり、木の実を集めたり、子どもたちは元気に駆け回ります。森の中では、子ども同士の争う声や泣き声、大人の叱り声も聞こえないので、澤渡さんが保育士に尋ねてみると、「自然という大きな空間で子どもたちは体を十分動かし、遊びに集中できる安堵感があるからでしょう²⁰⁾」と答えてくれたそうです。なお、「自然の産物とともに遊ぶことは、子どもたちの想像力や集中力を育み、遊びを通して自分の限界や可能性を知ることに役立っています²¹⁾」と澤渡さんは述べています。

(2) シュタイナー・スコウバーネヘーヴ保育園

2013年9月に訪れたこの保育園は、ブナ林の中の古民家が園舎です。子どもを自然の中で育てたいと思った親たちが、この家を保育園にしてほしいとロスキレ市に働きかけ、21年前にスタートしました。また、親たちはシュタイナー教育をベースにした保育を望んだので、現園長のピアギッテ・ハンセンさんが就任することになったそうです。家庭的な雰囲気のある保育園です。「ここは家にいるよりも居心地がいいのよ」と園長も語っていました。園の方針に共感した人が保育士として採用されているので、チームワークも良く、対立は無いそうです。原則3歳児から受け入れるそうですが、親の希望で2歳児も2名入所していました。

朝から子どもたちは外遊びに夢中でした。木の上で逆さになったり、木に吊したロープにぶらさがったり、ダイナミックな動きを楽しんでいました。庭の小屋にはストーブが置いてあり、寒い日は暖をとりながら遊

ぶそうです。自然豊かな環境で遊ぶ子どもたちですが、それでも毎日森にも出かけます。

森に行く時間になると、門の所に子ども達が集まって来ます。しかし、一人になっても園庭で遊び続ける子がいました。保育士さんはだまって見ているだけなので、不思議に思って尋ねると、「あの子は今園に来たばかりだから、もう少しここで遊びたいと言ったの」という答えが返ってきました。さらに、「今日は森に行かない子が二人いるの、森が好きな子でも行きたく無い時もあるの」と言われたので驚きました²²⁾。

森に出かけると、いろんな発見があります。珍しいキノコが生えているのを指さし、名前を教えてくれる子もいました。森で過ごしなが、自然は刻々と変化していることを子どもは敏感に感じているようです。

(3) スコウボー・スコウバーネヘーヴ保育園

2014年の10月に訪問した日は、雨が降っていました。初秋だというのに、身体が冷たくなります。しかし、子どもたちは雨でぬかるんだ園庭に座り込み、どろんこ遊びに夢中です。天候が悪い日は、外に出かけることが少ない日本の子どもと異なり、たくましい子どもに育つのだらうと思いました。

ロバート・グランダル園長（男性）の呼びかけで、子どもたちは森へ行く準備を始めました。準備に時間がかかる子もいましたが、保育士は何も言いません。しばらく待っていると、やっと着替えやお弁当を詰めたリュックを背負って、集合場所にやってきました。

森へ行く途中、雄鹿に遭遇しました。大きな角があり、近づくのは危険だと子どもが言っていました。この森には2千頭位鹿がいるそうです。森に着くと、子どもたちは好きな遊びに没頭します。木の実を取って食べてみたり、倒木の上を渡ったり、棒きれを拾って遊んだりしています。ひとしきり遊んだ後、先生が「お弁当を食べよう」と呼びけると、皆集まってきました。小さな敷物を広げる子、倒木に腰掛ける子、好きな場所に座り、お弁当を広げます。黒パンとハムに野菜が添えられているだけですが、おいしそうに食べていました。人参スティックを何本も食べている子もいました。

昼食後も子どもたちは森の中で、遊び続けます。トイレも無いので、自然の中で用を足していました。この保育士さんは自然が好きな人が集まっているので、子どもたちも一緒に遊ぶ仲間と思っているようでした。園長も野外遊びの達人なので、子どもがいつも群がり、歓声が聞こえていました。

2. 自分で考え、遊びを創り出す

デンマークの保育所では、子どもたちが自分で考え、自分の個性に合った選択ができるように、様々な活動の場や遊具が用意されています。あらゆる場面で子どもの意志が尊重され、大人が設定した活動に参加するかしないかも選択できることをみてきました。また、保育の構造や日課を見直し、子どもたちが思い切り遊べるように制限を少なくする配慮がなされています。なお、子どもたちだけの世界で遊べるように、大人から見えない場所を作る工夫もされています。

こうした理念に基づく保育を森の中で行っているのが、「森のようちえん（保育園）」の実践だという印象を受けました。遊具も無いので、自分で工夫したり、考えたりしなければ、自然の中で楽しむこともできません。遊びをよりおもしろくするために、仲間と協力することや助け合うことも必要になります。もちろん、雨に濡れたり、寒さにごえたり、自然の中で過ごすことは心地良い体験ばかりではありません。しかし、このような自然の厳しさに対処する智恵も身につけていきます。子どもの自主性、創造力、身体技能、感性、連帯・共同する力なども総合的に育まれるのだと思います。

おわりに

民主主義の国を築いてきたデンマークでは、子育てにおいても「自分で物事を考え判断できる自立した人間の育成」を重視しています。保育園の生活からも、子どもたちは周りの人とよく話し合い、自分の考えをまとめ、自己判断・自己決定していることがうかがえます。失敗しても、そこから学ぼうとしています。

保育の様子を見ていても、①子どもの成長の速度や興味・関心の違いに配慮した支援がなされている。②子どもを良く見て、共感し、理解し、そのまま受け入れてあげる、「認め保育」がなされている。③生活や遊びにおいて選択肢がいくつも用意されており、自己選択・自己決定するよう促される。④対立や葛藤を解決するため、話し合いが重視されている、といったことがうかがえます。

このように、子どもが自分らしく生活し、遊べるように保育士はなるべく口出しせずに見守っています。子どもたちは大人から命令されたり、一方的に指示されることはありません。他者と比べられ、優劣を競わされることもありません。保育所は集団生活を学ぶ場であり、協調性が育つように指導し、訓練することが当たり前だと思う人にとっては、何もかも驚きの体験になると思います。

デンマークの子どもたちにとって保育所は楽しい場所です。親も安心して子どもを預けることができます。子どもたちは仲間と遊ぶ中で、様々なことを学んでいきます。けんかが起きても、話し合いを通して、相手との折り合いをつけることも学びます。自分の意思をきちんと聴いてもらえる体験を通して、相手の意思を尊重する気持ちも育ちます。このような幼児教育を体験した子どもたちが、大人になった時、自由・平等・共生・連帯をベースにした民主主義の社会を築いていくのだと思われまます。

さて、「個を大切に保育に学ぶ」というテーマで様々な角度から論じてきましたが、今回は取り上げることができなかった課題もあります。例えば、「個人主義」と「利己主義」の違いについて説明していません。自己決定には自己責任が伴うことについても説明していません。なお、個人に全ての責任を負わせる「自己責任論」との違いについても説明する必要があったと思います。

こうした視点も踏まえながら、デンマークの保育についてさらに理解を深めるためには、観察対象とする保育園を増やし、理念と実践の分析を進めなければなりません、今後の課題にしたいと思います。

〈謝辞〉

研修のコーディネーター兼通訳をくださった澤渡夏代プラントさんに大変お世話になりました。特に、ご自身の体験や深い洞察に基づき、デンマークという国をいろんな角度から検討する際に多くの示唆を与えてくださいました。また、大野睦子ビャーソーさん、青江知子さんに心から御礼を申しあげます。お二人との出会いを通して、デンマークの保育について理解を深めることができました。最後に、研修を受け入れてくださった、デンマークの保育園の先生方と子どもたちに感謝申し上げます。

注

- 1) 澤渡夏代プラント『デンマークの子育て・人育ち』大月書店、2005年。
- 2) 青江知子・大野睦子ビャーソー『個を大切に保育するデンマークの保育』自費出版、2010年。
- 3) 前掲書 p.1。
- 4) 大熊由起子『寝たきり老人のいる国、いない国』ぶどう社、1991年。
- 5) 鈴木優美『デンマークの光と影：福祉社会とネオリベリズム』リベルタ出版、2010年 p.40。

- 6) 1970年代から1980年代に、オランダのマリア・アーツ (Maria Arts) が教育カウンセリングの方法として開発したものです。施設では、認知症の人とのコミュニケーションを図る方法として使われていました。
- 7) 花村春樹『ノーマリゼーションの父 N・E・バンクーミケルセンその生涯と思想』ミネルヴァ書房, 1998年。
- 8) 清水満『生のための学校』新評論, 2002年。
- 9) 2012年の国民学校の平均的1クラスの生徒数は19.6人です。なお、教員と生徒数の対比は1:10.7人です。澤渡夏代ブランド「デンマーク及びロスキレ市のミニ情報」2014年3月参照。
- 10) 小谷正登「幸福度世界一の国デンマークの教育事情—1年間の生活体験を通して—」関西学院大学教職教育研究センター、デンマークのペダゴギーに関する研究。留学先:リレバルト大学社会教育学部(オーデンセ市)。研究課題。(1) ペダゴギーの活動領域。https://www.google.co.jp/webhp (最終閲覧日2014年11月)
- 11) 中能孝則「デンマークの豊かな社会福祉と日本人の意識改革」ひの社会教育センター参照。
- 12) 澤渡夏代 Brandt「平等意識をはぐくむデンマークの保育・子育て」2014年講義資料参照。
- 13) 大野睦子ビャーソウー講演資料「デンマークの保育・子育て—LYNGBY DANMARK にて—」2013年10月。大野氏は1977年よりコペンハーゲン近くのリュングビュー・トーベック市立パピロン総合保育園に保育士として33年間勤務した経験があり、現在は講演などでデンマークの保育を日本に紹介しています。
- 14) デンマークには幼稚園はありません。6ヶ月~3歳児までは乳児園、3歳児から6歳児までは保育園が預かります。乳児園と保育園が総合されている園は、統合保育園と呼びます。
- 15) 2014年11月に来日された大野さんに、岡山市でインタビューを行った時にお聞きした内容です。
- 16) 青江知子・大野睦子ビャーソウー『個を大切にするデンマークの保育』。
- 17) 前掲書, pp.78-79。
- 18) 前掲書, p.80。
- 19) 「森のようちえん」と日本では言っていますが、デンマークでは保育園が多いので「森のようちえん(保育園)」としました。
- 20) 澤渡夏代ブランド『デンマークの子育て・人育ち』大月書店, 2005年, p.125。
- 21) 前掲書, p.126。
- 22) 「パピロン保育園でバスに乗って、園外保育に出かける時、急に行きたくないと言い出す子どもがいたけど、その子の気持ちを尊重して一人で園に残る措置が取られた」というエピソードを青江さんも紹介しています。(青江知子他『個を大切にするデンマークの保育』p.1)。

参考文献

- 伊藤美好『パンケーキの国で』平凡社, 2001年。
- 澤渡夏代ブランド『デンマークの子育て・人育ち「人が資源」の福祉社会』大月書店, 2005年。
- 宮下孝美他『あなたの子どもは、あなたの子どもでは無い』萌文社, 2005年。
- 澤渡夏代ブランド『デンマークの高齢者が世界一幸せな訳』大月書店, 2009年。
- 千葉忠夫『世界一幸福な国デンマークの暮らしかた』PHP新書, 2009年。
- ケンジ・ステファン・スズキ『デンマークが超福祉大国になったこれだけの理由』合同出版, 2010年。
- ケンジ・ステファン・スズキ『消費税25%で世界一幸せな国デンマークの暮らし』角川新書, 2010年。
- 鈴木優美『デンマークの光と影:福祉社会とネオリベラリズム』リベラ出版, 2010年。
- 銭本隆行『デンマーク流「幸せの国」のつくりかた』明石書店, 2012年。
- 上野勝代他編『あたりまえの暮らしを保障する国デンマーク』ドメス出版, 2013年。
- 中能孝則「人を育てる・育ちあうデンマークの豊かな教育」ひの社会教育センター研修会資料2013年。
- 澤渡夏代ブランド「平等意識をはぐくむデンマークの保育・子育て—子ども時代は子どもらしく—」ひの社会教育センター研修会資料2014年。

櫻谷眞理子教授 略歴と業績

I. 略 歴

- 1949年11月 鹿児島県に生まれる
- 1972年3月 鹿児島大学教育学部卒業
- 1974年3月 大阪市立大学大学院家政学研究科修士課程修了
- 1974年4月 大阪精神薄弱者育成会
- 1975年6月 東大阪市教育研究所研究主事
- 1979年7月 三重県児童相談所心理判定員
- 1982年4月 三重県婦人相談所心理判定員
- 1989年4月 三重県身体障害者更生相談所主査
- 1993年4月 三重県南勢志摩児童相談所主査
- 1996年4月 立命館大学産業社会学部助教授
- 2002年4月 立命館大学産業社会学部教授
- 2015年3月 学校法人立命館定年退職
- 2015年4月 立命館大学特別任用教授, 名誉教授

(学内役職歴)

- 1997年4月～2000年3月 産業社会学部社会福祉士課程委員長
- 2001年4月～2002年3月 産業社会学部学生主事
- 2011年4月～2012年3月 産業社会学部大学協議員
- 2012年4月～2015年3月 立命館大学特別ニーズ学生支援室アドバイザー

II. 専門分野

担当科目 家族関係論, ライフサイクル論, 社会福祉援助技術演習

研究課題 子育て不安・子育て支援の研究, 児童虐待と家族援助に関する研究, 児童養護施設退所者へのアフターケア研究

学 位 家政学修士 (大阪市立大学, 1974年3月)

所属学会 日本生活指導学会, 日本心理臨床学会, 日本虐待防止学会, 日本保育学会 他

III. 主な研究業績

著 書

1. (共著)「障害児保育はどうすればよいか」(横山明他編, 『乳幼児の発達と保育』第7章1節・3節, 三和書房, 1977年) 206-211頁, 231-248頁

2. (共著)「中学生は今、親とのどんな関係を求めているのだろうか」(横山明他編,『中学生の発達と教育』第3章,三和書房,1984年)82-116頁
3. (共著)「子育ての危機と保育要求の深化」(鷺谷善教編,『子育ての危機と保育の公的保障』第1部第1章,ひとなる書房,1984年)20-48頁
4. (共著)「子育てで不安を抱える親への援助」(大橋喜美子編,『事例でわかる保育と心理』,朱鷺書房,2002年6月)209-231頁
5. (共編著)「今子育て支援に求められていること」「乳幼児の生活実態と子育て支援の課題」(垣内国光・櫻谷眞理子編,『子育て支援の現在』,ミネルヴァ書房,2002年8月)1-23,26-48頁
6. (共著)「乳幼児期の子育て支援のニーズと実際」(竹中哲夫・垣内国光・増山均編,『新・子どもの世界と福祉』,ミネルヴァ書房,2004年6月)105-114頁
7. (共著)「子ども虐待・援助の現状」(加藤直樹・峰島厚・山本隆編,『人間らしく生きる福祉学』ミネルヴァ書房,2005年4月)84-91頁

論 文

1. (単著)「今日の乳幼児と家族」(『教育』436号,国土社,1984年)16-26頁
2. (単著)「今日の家庭状況と保育のあり方」(『季刊保育問題研究』90号,全国保育問題研究協議会,1984年11月)4-12頁
3. (単著)「家庭で育つ0～3歳児の生活実態と母親の育児意識調査—乳幼児の生活と母親の育児不安—」(『心理学の探究』第3号,名古屋地区心理科学研究会,1985年)1-9頁
4. (単著)「今日の乳幼児の生活と家庭状況」(『生活問題研究』第2号,生活問題研究会,1986年11月)4-24頁
5. (単著)「忙しい!でも,よりよい生活への努力を大事にしたい」(『現代と保育』編集部編,『乳児の生活リズムと自立』,ひとなる書房,1988年)22-28頁
6. (単著)「短い時間でも豊かなふれあいを」(『現代と保育』第23号,ひとなる書房,1990年)25-31頁
7. (単著)「教育心理学と実践活動—福祉現場における心理判定員の視点で—」(『教育心理学年報』第31集,1991年)146-152頁
8. (単著)「現代家族の育児不安の諸相(1)—乳幼児の生活と母親の育児不安調査より—」(『保育情報』第189号,保育研究所,1993年)12-16頁
9. (単著)「現代家族の育児不安の諸相(2)—専業主婦の生活と育児不安—」(『同上』第192号,同上,1993年)7-10頁
10. (単著)「就学前児の仲間との共同と対人的態度の形成に関する検討—保育園における共有体験を土台にした話し合いの実践を通して—」(『子どもの自発的な学習の社会的側面の解析』平成9—11年度科学研究費の研究成果報告書,2000年3月)95-106頁
11. (単著)「乳幼児をもつ母親の育児意識調査から見えてくるもの」(『生活指導研究』第17号,エイデル研究所,2000年8月)124-137頁
12. (単著)「子育てに関心をもてない母親・父親」(『児童心理』No.745号,金子書房,2001年2月)34-38頁
13. (単著)「児童福祉の問題」(大泉溥編,『教育と保護の心理学』別冊改題,クレス出版,2001年9月)

13-23頁

14. (単著)「今日の子育て不安・子育て支援を考える」(『立命館人間科学研究』第7号, 立命館大学人間科学研究所, 2004年3月) 75-86頁
15. (単著)「子育てのネットワークを広げる—孤立を防ぎ, 子育てを楽しむために—」(『児童心理』No.805, 金子書房, 2004年5月) 69-73頁
16. (単著)「子どもの虐待と家族援助」(部落問題研究所『人権と部落問題』N072, 2005年2月) 69-73頁
17. (単著)「子育ての実態と親のニーズについて」(『立命館人間科学研究』第8号, 立命館大学人間科学研究所, 2005年3月) 69-79頁
18. (単著)「イギリスの児童保護の現状と課題」(『立命館産業社会論集』45巻1号, 2009年6月) 35-51頁
19. (単著)「子どもたちの『困った行動』の理解と援助」(季刊『ひろば』No.159, ひろば・京都の教育刊行委員会, 2009年8月) 4-9頁
20. (単著)「子ども虐待—介入と援助について考える」(部落問題研究所『人権と部落問題』No.807, 2010年10月) 6-15頁
21. (単著)「児童養護施設における生活指導・援助の課題」(『生活指導研究』N0.28, エイデル研究所, 2011年9月) 27-39頁
22. (単著)「児童養護施設退所者へのアフターケアに関する研究」(『立命館産業社会論集』49巻4号, 2014年3月) 139-149頁

その他

1. (単著)「障害児をふくめた集団づくり」(『季刊保育問題研究』77号, 全国保育問題研究協議会, 1981年11月) 22-25頁
2. (単著)「子どもの生活実態調査から保育所への要望をみる」(『保育の友』32巻10号, 全国社会福祉協議会, 1984年) 39-41頁
3. (単著)「夫婦の不和・未婚の母などの場合」, 「親せきづきあい, 近所づきあい」, 「夫婦の協力」, 「母子家庭, 父子家庭の子育て」(須藤敏明他編『子育て百科』, 大月書店, 1985年)
4. (単著)「婦人相談所から」(第13回児相研セミナー『日本の子どもと児童相談所』, 1987年) 253-256頁
5. (単著)「軽度の遅れのある人の中卒後の自立をめぐる」(第14回児相研セミナー『日本の子どもと児童相談所』, 1988年) 189-193頁
6. (共同調査)「東海地方に九州から流入してきた若年労働者の青年期について—家族形成の問題の検討—」(研究代表者大村恵子, 『研究助成報告論文集』第3章その2, 上廣倫理財団, 1990年) 69-78頁
7. (単著)「虐待される妻たち」(『生活問題研究』第3号, 生活問題研究会, 1991年3月) 49-51頁
8. (単著)「母子寮」(日本子どもを守る会編, 『子ども白書1993年版』, 草土文化, 1993年)
9. (単著)「母子寮」(同上, 『子ども白書1994年版』, 同上, 1994年)
10. (単著)「ひとり親家族と子ども」(同上, 『子ども白書1995年版』, 同上, 1995年)

11. (単著)「一人親家庭の子ども」(同上,『子ども白書1996年版』,同上,1996年)
12. (単著)「母子寮」(同上,『子ども白書1997年版』,同上,1997年)
13. (共著)『現代家族の育児実態に関する地域調査報告書—大阪市・四日市市・武豊町・多摩市地域を対象として—』(「現代家族の育児困難と育児支援のあり方」研究会,1997年)
14. (単著)「婦人保護関係施設の現状と課題」(宮田和明他編,『改訂社会福祉実習』,中央法規出版,1998年10月)116-119頁
15. (単著)「性的被虐待児の軌跡と援助」,(子どもの虐待とネグレクト3巻1号,第6回学術集会(あいち大会)特集2001年)77-79頁
16. (単著)「育児困難」,「育児ストレス」,「育児不安」,「SIDS(乳児突然死症候群)」,「子殺し・間引き」,「代謝異常」,「父親(男性)の育児参加」,「低出生体重児」,「トラウマ」,「反抗期」,「ボウルビイー」,「ホスピタリズム」,「アダルトチルドレン」,「母性信仰」担当(一番ヶ瀬康子他編,『社会福祉辞典』,大月書店,2002年10月)
17. (単著)「子育てで不安・虐待の現状と家族支援の実際」(『季刊保育問題研究』210号,全国保育問題研究協議会,2004年12月)101-105頁
18. (単著)「児童虐待とひきこもり」(白井利明編著,『迷走する若者のアイデンティティ』ゆまに書房,2005年)244-246頁
19. (単著)「虐待者へのソーシャルワーク実践と子どものケアに関する研究についてのコメント」(『生活指導研究』22号,エイデル研究所,2005年)27-29頁
20. (単著)「育児時間」,「子育てサークル」,「子育てネットワーク」,「子育て支援」,「子育て支援事業」,「次世代育成支援地域行動計画」,「心理半定員」,「健やか親子21」,「多問題家庭」,「つどいの広場事業」,「特別保育事業」,「乳幼児健康支援一時預かり事業」,「ファミリーサポートセンター事業」,「父子手帳」,「親業」,「家庭崩壊」,「家族福祉」,「家庭支援専門相談員」(保育小事典編集委員会編,『保育小辞典』,大月書店,2006年6月)
21. (単著)「隣接領域からみた社会や若者の変容」(『保育士養成資料集—平成17年度全国保育士養成セミナー報告書—』第43号,全国保育士養成協議会,2006年2月)71-92頁
22. (単著)「児童養護施設での被虐待児へのケア」(『生活指導事典』,エイデル研究所,2010年)242-243頁
23. (単著)「人は皆平等であるデンマークに学ぶ」(『デンマークの感動を持ち帰って—自己決定の国・豊かな教育と福祉—』,(公財)社会教育協会日野社会教育センター,2014年9月)84-86頁

IV. 社会活動

- | | |
|-----------------|---|
| 1999年4月～現在に至る | 全国児童相談問題研究会運営委員 |
| 2003年9月～2004年3月 | 舞鶴市次世代育成支援対策推進行動計画策定懇話会副会長 |
| 2006年4月～現在に至る | 滋賀県甲賀市子ども家庭支援ネットワーク協議会会長 |
| 2009年7月～2010年3月 | 舞鶴市次世代育成支援対策推進行動計画(舞鶴市子育てアクションプラン)策定委員会会長 |
| 2010年4月～現在に至る | 滋賀県児童養護施設等の子どもの権利擁護委員 |
| 2014年9月～現在に至る | 滋賀県草津市要保護児童対策地域協議会委員 |